

權兵衛齋邸は、今の佐々木誠善宅地と云ふ。一説或は不開門外とも云ふ。とあり。按ずるに、或説は傳聞の誤なるべし。右の邸地は、延寶金澤圖に金森平藏向佐々木左門と見え、元禄六年の土帳に、佐々木左門、堤金森平七向深美右京近所。とありて、所謂石屋小路也。

○龜田權兵衛傳

三壺記に云ふ。權兵衛先祖は、昔足利尊氏將軍の時より、加州河北郡森下に龜田殿とて富家あり。近郷を押領し、大永の頃まで家榮えて有りけるが、越前の朝倉義高といへる者一揆共を討取りて加州をも合せ度と思ひ、龜田と申談じ、石川郡松任の蕪木を滅却せしめ、夫より龜田と一味して、加州を傾けんと申合ひけり。龜田が娘を蕪木に娶はせ、蕪木父子を森下へ招き寄せ、振廻の上にて討殺すに、残る一揆共、扱こそ龜田は越前と申合せ野心を企つると、いづれも一味同心して森下へ押寄せ、龜田一類を悉く討亡したり。此の時龜田の末子一人討洩らされて生残り、方々經廻りたる後は柴田勝家が家に扶助せられ、溝口半左衛門と申しけるが、柴田滅却の時越前にて追腹をぞ致しける。

半左衛門がせがれ、淺野但馬守に扶助せられ、度々の覺有りければ、鐵炮大將に被申付、龜田大隅と名乗り後法舛して鐵齋と申しけり。但馬守紀伊國和歌山より安藝の廣嶋へ被移。但馬物領は秀忠將軍の孫にて、安藝守と云ふ。此の時家來一人切腹被申付事に付、上田宗古物領主水と龜田大隅と半人と成り、後申分も立ちければ兩人共被召返。さて龜田鐵齋病死して、せがれ權兵衛又半人と成り、加州へ來り、江沼郡潮津と云ふ處に在郷して久々有之。龜田が家人覺えの侍生残りて在之を、利常卿被召出知行被下。菅野加右衛門子共兄弟、其の外花田加兵衛是也云々。とあり。關屋政春古兵談に云ふ。龜田大隅後鐵齋と云ひたる仁は、元來尾州の二寺と云ふ所の溝口善左衛門と云ふ者の子也。故に若き時は溝口半佑と云ひ、柴田修理勝家の子小姓と成り、後同苗伊賀守に仕へたり。賀州河北郡森下村の一揆大將龜田大隅守は、武勇に達したる者にて勝家の手に不付。依つて勝家より和談をなし、溝口半佑を人質に遣し、大隅禮を仕りたり。其時の様子能しとて、半佑を大隅掣とす。故に半佑溝口を改めて龜田と成り、後大隅に成りたりと。

則鐵齋物語の由或人いへり。又龜田權兵衛は、鐵齋が惣領の子也。大男にて大鬚鐘植大臣の如く、力量人に勝れ、高麗陣又は關原の時も心操あり。然れども無双のしはき者にて人外也。就夫父鐵齋とも義絶なり。去共武功もあり、鐵齋の惣領なるに依つて、利常卿一萬石被下也と。いへり。又三壺記に云ふ。龜田權兵衛金澤に居住するに至つて、金銀を數寄出で、買物の代物を遣すにも、一年も立ちて半分遣し、小鯛・小鮒を買置きて、朝より晩まで四・五人も肴賣を呼び入れ、小を大にかへて遣し、小鯛・小鮒も晩には大鯛・大鮒に成る事を覺えたり。奉公人は一年に四度・五度宛置替へ、給銀少しも不入して、扶持米のみにて人を仕ひ、剩へ彼奉公人共に、紡績のいとなみをあて、男には草鞋・繩・筵などあてければ、皆難儀して衣類道具を捨て行きけり。口に食しきを喰ひて、さのみ色にもふけらす。世間を止めて金銀の集る事を樂しみとす。終に家滅却す。是皆死すべきための病の品と申あへりとぞ。

○龜田權兵衛傳話

三壺記に云ふ。寛永十七年七月下旬の頃にや。龜田權兵衛

を夜討にし、金銀を取り行きけり。老中吟味せられ、家來の者共を捕へて、拷問様々なるといへども、曾て知るものなし。龜田居屋敷は惣構の外敷際也。神戸清庵と三輪法受の間に並び、龜田前に堀をほり、法受が塚堀を通し、兩方共堀縁に塀を懸けたり。法受と龜田との間なる堀をつたひ來て、權兵衛塀を切破り、下臺所の水流しの下を切あけ忍び入り、寢間に忍び入りて權兵衛を討ちけれども、金銀の有所不知。物置へ入りて見れば、女を一人縛り置きたり。汝何として縛られたるぞ。金銀の有所申すならば、助けて出すべしと云ふ。女曰く、我權兵衛殿の氣に違ひ、二三日爰に不食にて如此也。はなして賜はらば、金は寢間の脇に有るべしと云ふ。則ち繩を切りて、かまへて此の事申すと云ひて放しけり。然る處、吟味漸く日數を経て知れざりけるに、女一人目安を以て注進す。權兵衛を夜討に仕りたる者は、津田源右衛門家來蜂谷清兵衛と云ふ者也。同類に與する者は、才鶴理助と申者也。其の外にも候はん由言上す。則ち此の者共親兄弟迄召捕へられたり。彼の女は初め蜂谷清兵衛が妻也。近き頃離別せられ被追出て、後妻を